

## アルパの調べ

ーパラグアイ音楽レクチャーコンサートー

磯村 笑理

### はじめに

16世紀にスペイン人により南米にもたらされたハープが独自の変化を遂げたアルパは、パラグアイの国民楽器として親しまれている。日本にも、プロの奏者ばかりでなく、きらびやかな音色を持つこの楽器に魅せられた1000名程の愛好家がいると言われている。筆者はその愛好家のひとりとしてかれこれ10年余、アルパを学び、演奏してきた。



写真① パラグアイの首都アスンシオンの街並み  
(2005年8月15日、Asunción)

### 1. アルパの故郷パラグアイ

「南米の心臓」と呼ばれるパラグアイは南米大陸の中心にあり、ボリビア・アルゼンチン・ブラジルの3カ国に囲まれる。内陸国だが大変豊かな自然に恵まれ、農牧業が主な産業である。日本とほぼ同じ面積をもつものの人口密度は1平方キロあたり15人と少ない。人口の95%は先住民グアラニーと白人の混血で、スペイン語とグアラニー語を公用語とし、先住民文化とヨーロッパ文化が融合した独自の習俗が残っている。1936年よりパラグアイへの日本人移住が開始され、2016年には日系移民の移住80周年を迎える。移住者の多くは農業移住者としてパラグアイに渡り、野菜作りを広めたため、肉食中心のパラグアイにさまざまな野菜が普及した。

南米大陸にはもともと弦楽器は存在しておらず、16世紀に征服者としてやってきたスペイン人が南米大陸にハープをもたらした。17世紀～18世紀にかけイエズス会士が布教の道具としてハープやバイオリン等の楽器を用いたことによりこれらの楽器は南米大陸各地に広まった。彼らは演奏方法のみならず楽器の作り方も伝授し植民地現地でハープが作られるようになった。以来アルパは各地で独自の変化を遂げ、現在の形となった。スペイン語でアルパ (arpa)はハープの総称だが、日本ではラテンアメリカに普及したハープの呼称として定着している。本稿では、

日本での呼称に倣い、ラテンアメリカ各地にみられるフォルクローレの演奏に用いられるハーブをアルパと記す。

## 2. 世界アルパフェスティバル

今日、メキシコ、ペルー、ベネズエラ、コロンビアなどでもアルパは弾かれているが、パラグアイこそ最も盛んに演奏されている国である。パラグアイでは、フォルクローレの中心楽器として多くの機会に演奏され、「国民楽器」として民衆に親しまれている。

「アスンシオンを世界のアルパの首都にしよう」というアルパ奏者リト・ペデルセン Rito Pedersen の発案により、アルパのさらなる普及を促すため、2007年よりパラグアイの首都アスンシオンでは世界アルパフェスティバルが開催されている。アスンシオン市の支援を受け、世界アルパフェスティバル事務局により運営されるこのフェスティバルには、世界各国からアルパ奏者が集まり、現地のアルパ奏者ととも、3日間に渡るアルパの祭典をくりひろげる。アルゼンチンやメキシコなど、中南米の各国、またイタリア、フランスなどヨーロッパ、そして日本からも演奏家が盛大なコンサートに集い、演奏家によるマスタークラスも開講されている。

第7回にあたる2013年には、「参加者420人による世界最大のハーブアンサンブル」が披露され、ギネス世界記録として認定された。指揮者・作曲家として活躍するルイス・サラン Luis Szarán 指揮のもと、パラグアイポルカの名曲、「パハロ・カンパーナ（鐘つき鳥）Pájaro campana」と「カレータ・グイ（牛車の下で）Carreta güy」が続けて計6分間演奏された。総勢420名の内訳は8歳から70歳までと幅広い年齢層に渡り、ブラジルやイギリスからも参加者があった。

ギネス記録に挑戦した団体はソニードス・デ・ラ・ティエラ Sonidos de la Tierra（大地の音）という。2002年にルイス・サランが創設したこの団体は、音楽を通じて子供たちを貧困と犯罪から救うことを目指している。貧しい地域や音楽に触れる機会の少ない地域の子供たちに、アルパやギター、バイオリンほか、さまざまな楽器を教え、演奏活動を組織している。ギネスの記録に挑戦したアンサンブルメンバーはオーディションによって選ばれており、ソニードス・デ・ラ・ティエラのメンバーのほか、中上級レベルのアルパ奏者やプロのアルパ奏者もアンサンブルに加わった。ソニードス・デ・ラ・ティエラはゴミの埋立地から集めたアルミ缶や水道管、フォークや瓶のふたなどで楽器を作り、手作り楽器を用いたオーケストラを2007年に編成した。このオーケストラは演奏ツアーで2009年にはドイツ、オーストリア、スイス、2010年にはドイツ、イタリア、スイスを訪れている。2013年には来日し、品川教会と大阪国際交流センターでコンサートに出演した。

## 3. アルパの演奏スタイル

パラグアイでアルパを耳にすることができるのは、ライブ・レストランやフェスティバル、コンサート、ホームパーティーなどである。ギター伴奏を伴うことが多いが、独奏楽器としても演奏される。パラグアイのアルパ奏者はそのほとんどが男性で、力強いダイナミックな演奏

もアルパの魅力の一つだ。女性はアルパの演奏に合わせて、「ダンサ・パラグアージャ」を踊っている。パラグアイの民族舞踊の中でも、もっとも華やかで人気のあるのは、頭の上にボトルを何本も乗せて踊る「ダンサ・デ・ボテージャス（ボトルダンス）」である。脚立に乗った男性がビンの上にさらにビンを積み足していくのだが、名人のダンサーともなると15本もビンに乗せて踊ることができる。

首都アスンシオンにあるライブ・レストラン「シエルボ・ブランコ（Ciervo Blanco）」では、アルパ奏者による生演奏を聴きながら食事を楽しめる。現代アルパ界を代表する人気アルパ奏者マルティン・ポルティージョ Martín Portillo（写真②）とマルセロ・ロハス Marcelo Rojasは、このレストランにしばしば出演する。両者とも、パラグアイ国外でも活躍するアルパ奏者で、度々来日している。



写真② 「シエルボ・ブランコ」で演奏するマルティン・ポルティージョ（2005年8月16日、Asunción）

マルティン・ポルティージョは2003年11月～12月、民音に招かれ「マルティン・ポルティージョ&アメリカンタ」と題するコンサート（日本各地計34カ所）に出演した。2010年10月にはマルセロ・ロハスと共にアスンシオン民族音楽交流団の一員として来日し、千葉市とアスンシオン市の姉妹都市提携40周年記念コンサートで演奏を披露した。2013年に演奏活動25周年を迎え、その記念CD「Esplendida」には、25周年にちなみオリジナル曲25曲が収録されている。そのうちの一曲「遠いあなたへ Lejos de ti」はグアラニア（後出）のリズム形式の名曲で、日本のアルパ奏者たちも好んで演奏している。近年は、ソニードス・デ・ラ・ティエラの音楽監督としての指導にも精力的に当たっている。

マルセロ・ロハスはアルパフェスティバル「第13回春のアルベジオ」のゲストとして2003年5月に初来日して以来、しばしば日本で公演し、日本のアルパファンを魅了している。彼は、半音操作用シャープレバーの付いたアルパを愛用しており、シャープレバーによる半音操作を生かしたアレンジも見事だ。また、アルベジオの美しさが際立っているのも、彼の演奏の特徴だ。前出「カレータ・ガイ」など力強いポルカから、「アルフォンシーナと海 Alfonsina y el mar」や「ピアノ Piano」などのロマンティックな曲の演奏まで、非常に高い評価を受けている。

#### 4. アルパには「ない」もの

アルパの特徴を、アルパには「ない」ものの視点から以下挙げてみる。

(1) アルパの演奏曲には楽譜がなく、先生の演奏を見聞きして、曲を習得する。そもそもアルパ用の曲は伝承により保持され、元来、西洋式楽譜というものは存在していなかった。現在で

は、採譜した楽譜を用いて教えることもあるが、そのような教授法を用いる先生は少数派である。また演奏においては、曲のアレンジは自由で、「100人アルパ奏者がいれば、100通りの演奏がある」とも言われている。楽譜は存在しても、奏者によってアレンジが異なるため、全てを採譜することは難しい。どんなアレンジを施すかも、奏者それぞれの腕の見せどころと言える。

(2) アルパの弦は36～37本あり5オクターブの音域をもつが、ピアノでいうと白鍵の部分にあたり、全音階で調弦されているため、弦をそのままはじくだけでは、半音を出せない。弦の下部付近にある突起に弦を押しつけたり、ジャベ llave（金属製の指輪状の器具）で、弦の上部を押しやることで、半音を出すことが可能になる。

ジャベによる半音操作の技法を考案したのが、ニコラス・カバジェーロ Nicolás Caballero である。現代アルパ界のトップ奏者である彼は1949年アスンシオン生まれ。3歳の時に父親からアルパを習い始め、4歳にして、アスンシオンの市立劇場でアルパを演奏した。超絶技巧を駆使し、パラグアイ音楽だけでなく、タンゴ、フラメンコ、ロック、ジャズ、ハワイアン、ポピュラー音楽と、さまざまなジャンルの曲を弾きこなすが、その天才的演奏は、まるで何人もの奏者が同時に演奏しているかのように聴こえる。アルパ奏者としてだけでなく、作曲家、編曲者、音楽監督としても活躍し、オーケストラと共演するほか、幅広く活動している。

最近では、アイリッシュハープのようなシャープレバーのあるアルパを使用する演奏家もいる。ジャベの使用、もしくはシャープレバーのあるアルパの使用により、半音操作が比較的容易になった。全音階に調弦されたアルパのための曲は、半音を使用しないものが主だったため、当たり前のことだが従来は半音を出す必要がなかった。現在では、中南米各地の曲、ジャズやロックなど、パラグアイ音楽に限らずさまざまなジャンルの曲が演奏されるようになったため、半音操作が必要となった。アルパ用に作曲される曲にも半音操作の必要な曲が増えている。

(3) アルパは、演奏中に調弦を変えることができないため、転調が出来ない。通常、へ長調もしくはト長調を基本の調弦とする。

(4) パラグアイのアルパは本体と糸蔵（ヘッド部分）、支柱が接着されておらず、全ての弦を緩めるとバラバラになってしまう。

## 5. アルパの構造

アルパの共鳴板とボディ（本体部分）は杉や松でできている。パラグアイ産の木材のほかカナダやドイツからの輸入材が使われることもある。ボディ内部は空洞となっており、1つもしくは2つのサウンドホール（写真⑥）がある。高さは約140cm、幅（下部の広い部分）は約40cmであり、重量は7kg程度。弦にはナイロン弦（低音はナイロンの巻き弦）が使用され、弦の数は36弦から37弦のものが最も多い。調弦に使用する糸巻きは、現在は、ギターに使用されるのと同じタイプのネジ巻き式のものが使われている。



写真③ 通常のアルパ



写真④ シャープレバーの付いたアルパ



写真⑤ 弦の下部付近には突起があり、この部分に弦を押しつけることによって、半音を出せる。



写真⑥ サウンドホールはアルパの下部、もしくは背面にある。

(写真③～⑥ 2015年11月28日、Tokyo)

## 6. アルパ工房

アスンシオンとその近郊のルケ市には多くのアルパ工房がある。アルパは職人の手により、一台一台丁寧に作られている。アルパを飾る美しい彫刻も手作業で彫られているため、一台として同じものは存在しない。彫刻のモチーフには、マテ茶の葉がよく用いられる。南米各国で愛飲されているマテ茶には仲間で回し飲みする習慣がある。アルパ奏者が集う場でもあるアルパ工房では、マテ茶の回し飲みもしばしば見られることだろう。



写真⑦左 写真⑧右 このアルパ工房ではアルパとギターが制作されている。(2005年8月23日、Asunción)

## 7. ニヤンドゥティ (ñandutí)

前述したとおりパラグアイのアルパ奏者には男性が多い。彼ら男性奏者が演奏時の衣装として頻繁に着ているのが民族衣装アオポイのシャツである。一方、踊り手の女性、数は少ないもののパラグアイの女性アルパ奏者、そして日本の女性アルパ奏者が着用するのは、ニヤンドゥティのドレスである。ニヤンドゥティはパラグアイの代表的民芸品として人気が高く、近年は日本でも手芸愛好家の間で人気が高まっている。ニヤンドゥティは、グアラニー語で「蜘蛛の巣」を意味する。16世紀～17世紀頃、イエズス会士の伝えたテネリフェレースがもとになったと言われるニヤンドゥティは、かつては白い糸のみで作られていたが、現在ではカラフルな色使いが特徴となっている。細い綿の糸と針、布を張った木枠を用い、織り上げていくように作るレースは大変手の込んだもので、ドレスを1着仕上げるのに半年程度かかる。

## 8. パラグアイ音楽の主なリズム形式、ポルカとグアラニア

パラグアイの主なリズム形式は、ポルカとグアラニアだ。パラグアイのポルカはボヘミアの民族舞踏に起源をもつポルカ（2拍子）がヨーロッパから伝播し変化したものである。そのリズムはヨーロッパのポルカとは異なり、8分の6拍子である。これをアルパで演奏するには、左手で3拍子、右手で2拍子をきざむ。パラグアイの人々には大変なじみのあるリズムだが、このリズムに親しんでいない日本の奏者が習得するには時間がかかる。一方3拍子のグアラニアはロマンティックな歌曲や、ゆったりした曲に使用される。「君偲ぶ夜 *Mis noches sin tí*」や「イパカライの思い出 *Recuerdos de Ypacaraí*」などがその代表曲である。

## 9. 演奏曲リスト

受講生セミナーでは以下の5曲を演奏した。

- (1) コンドルは飛んでいく～花祭り (メドレー)／伝承曲  
**El condor pasa, Carnavalito (El Humahuaqueño)**  
「コンドルは飛んでいく」は、サイモン&ガーファントルのカバーで大ヒットした。「花祭り」と共に、日本でも広く知られるフォルクローレの名曲。
- (2) エル・ボジェリート (牛飼いの少年)／エンリケ・サマニエゴ作曲  
**El boyerito / Enrique Samaniego**  
パラグアイのポルカの曲。名アルパ奏者のエンリケ・サマニエゴは、「アポロニータ」ほか、多くの名曲を作った。
- (3) レホス・デ・ティ (遠いあなたへ)／マルティン・ポルティージョ作曲  
**Lejos de ti / Martín Portillo**  
グアラニアのリズム形式によるロマンティックな曲。アルパ奏者マルティン・ポルティージョは、演奏旅行に出かけたヨーロッパの地にて、故郷に残した恋人を想ってこの曲を作ったと言われている。
- (4) カスカーダ (滝)／ディグノ・ガルシア作曲  
**Cascada / Digno García**  
ポルカのリズムによるアルパの名曲。ディグノ・ガルシアは、アルパを世界に広めた奏者。故郷に流れる小さな滝をイメージしてこの曲を作ったと伝えられるが、現在では、イグアスの滝を思わせるようなダイナミックな演奏をする奏者が多い。アルパ奏者は必ずレパートリーに入れていると言っていいほど広く演奏されている、アルパの代表曲だ。
- (5) コーヒーランバ (モリエンド・カフェ)／ホセ・マンソ・ペローニ作曲  
**Moliendo Café / José Manzo Perroni**  
ベネズエラのアルパ奏者ウーゴ・ブランコの演奏で世界的にヒットした曲。原曲は、ブランコの叔父であるベネズエラの作曲家ホセ・マンソ・ペローニが、コーヒーをモチーフに1958年に作詞・作曲した「Moliendo Café (コーヒーを挽きながら)」。日本では、西田佐知子、萩野目洋子、井上陽水らが歌ってヒットした。

## 10. 世界で活躍するアルパ奏者

パラグアイ国内のみならず、パラグアイ・アルパの奏者は世界中で活躍している。伝統的な奏法を得意とする奏者から、現代的なアレンジを加え、独自の音楽世界を表現するアルパ奏者までと、さまざまな顔ぶれが並ぶ。ここでは祖国を離れ、活躍するパラグアイ人アルパ奏者を2名紹介する。

セルソ・ドゥアルテ=ゴンサレス Celso Duarte Gonzálezは、メキシコ在住のアルパ奏者。伝統的な奏法、力強い演奏で、アルパの魅力を最大限に引き出す名手だ。「カスカーダ」や「ジェガーダ (到着) Llegada」など、アルパの名曲をダイナミックに演奏する。イスマエル・レデスマ Ismael Ledesmaは、独自の感性で多くの曲を作曲するフランス在住のアルパ奏者である。「インディオのバラード La balada del indio」、「アスンシオンに咲く花 Flores de Asunción」、「アマ

ソナス Amazonas」などの曲は、日本のアルパ奏者にも演奏されている。

## おわりに

ヨーロッパから伝わったハーブがパラグアイで独自の変化を遂げたアルパは、今日、南米はもちろん世界各地で愛され、日本でも知られるようになった。まだまだ他の楽器と比べれば知名度は低いですが、一度その音色を聴くとそのとりこになる人が多い。まずはアルパの音色を直に知ってもらうのが一番と考え、受講生セミナーでは話をするだけでなく生の演奏を皆さんに聴いてもらった。

質疑応答では、アルパの重さや運搬方法、日本のアルパ奏者の人数はどのくらいいるのかといった質問を受けた。アルパはかさがあるため重たそうに見えるが、実際の重さは7キロ程度であり、肩掛け紐の付いたナイロンのケースに入れ、肩に掛けて運ぶ。そのようにして、電車で移動するか、車の後部座席に載せて運搬する。プロのアルパ奏者として数十人ほどが活動している。アマチュアのアルパ奏者は1000人前後とみられているが、実数は把握できていない。アンケートでは、初めて聴くアルパの音色と演奏への感想がたくさん寄せられた。

当日ラテンアメリカ講座のゲストスピーカーとして、革命家チェ・ゲバラの甥マルティン・ゲバラ氏が来学されており、受講生セミナーにも参加された。同氏とそのご子息のマルティン君からも質問を受けた。

アルゼンチン出身のマルティン・ゲバラ氏は、筆者が演奏した「カルナバリート」がアルゼンチン北部の町のカーニバルをモチーフとしているだけにとってもなじみがある、またパラグアイ音楽も良く知っていると言った。そして、「アルパの演奏では、楽譜を使わないということを知らなかったのだが、曲は耳で聴いて覚えるのですか？」という質問を受け、筆者は、「耳で聴いて覚えます。子供にとっては簡単だと思いますが、大人になると、なかなか大変です」と返答した。「東京でパラグアイのアルパの演奏を聴くことができ、とてもうれしい」というコメントもいただいた。

ご子息のマルティン君からは、「アルパは、何の木で作られているのですか？」と質問を受け、筆者は、「杉と松で作られています」と答えた。一家は、セミナー終了後に壇上までやって来て、アルパに直接触れ、大変興味深げだった。スペインから南米に伝わった楽器であるアルパに、アルゼンチンに生まれ、現在はスペインに暮らすマルティン氏の一家が関心を持たれたことは、単なる偶然ではないかのようにも思えた。

時代とともに、楽器に改良が加えられ、現代的な曲の解釈や作曲が行われつつも、アルパでの演奏には、パラグアイならではの土臭さ、人間味が感じられる。それこそが、パラグアイ音



写真⑨ 受講生セミナーにも参加したマルティン・ゲバラ一家と筆者（写真右）。  
(2015年6月27日、Tokyo)



楽とアルパの最大の魅力であろう。

〈参考文献〉

浜田滋郎、1980、『エル・フォルクローレ』、晶文社。

早川智三、2006、『アルパの調べと歌』、知玄舎。

2010、『パラグアイ音楽名曲選』、知玄舎。

〈お勧めCD〉

ニコラス カバジェーロの音世界-Arpa レーベル：Take Off

ニコラス カバジェーロの音世界-Polka レーベル：Take Off

パラグアイのアルパ~ロス・ドゥアルテ レーベル：キングレコード

\*写真注記

写真②および⑨についてはホルティエージョ氏およびゲバラ氏それぞれ掲載許諾承認済。記して御厚意に深く感謝する。

(いそむら えり 本講座受講生)

